

城

第四十七回 備中松山城

—要塞から象徴としての山城へ—

山本 忠博

今回は、天空の城と呼ばれる備中松山城(以下、単に「松山城」といいます)を、ご紹介しましょう。この城の映像を、知らず知らずのうちにご覧になっていた方は、意外と多いのではないかと思います。それというのも、昨年放映されていたNHKの真田丸のオープニングに映し出されていた城が、この松山城だったからです。この映像からだけでも、けっこうな情報が得られたのですが、詳しくは追々書くことにしましょう。



天守

出典：<http://www.city.takahashi.okayama.jp/site/bichu-matsuyama/juyoubunkazai.html>

はじめに概略

松山城は、現在の岡山県高梁市に在ります。標高430mの臥牛山の山頂に築かれており、現存12天守の中で、天守が最も高い所に在る山城です。天守の規模は小さくて、現存12天守の中で一番低く、その高さは11mです。

この城が築かれたのは鎌倉時代(1200年代中頃)です。当地の地頭によって築られました。その後、戦国大名の三村氏によって一大城郭が形成され(1500年代)、江戸期に入ってから、水谷氏が現存の天守を建築しました(1681-83年)。そして、その天守が、現存に受け継がれているわけです。

松山城の歴史の長さからも推測されるように、この城にたざさわった人は多くいます。歴史好きの方ならご存知であろう人物が、戦国時代から幕末まで何人か登場します。

戦国時代

戦国時代に、松山城を居城としたのが備中(現岡山県

西部)の三村氏です。三村氏は、家親(1517-66年)の代に最盛期を迎えました。当時の備中は、山陰の尼子氏の勢力が優勢でした。家親は、山陽の毛利氏と結んで尼子氏の勢力と戦い、備中のほぼ全域を手中にしたうえで、備前(現岡山県南東部)西部に進出し、さらに美作(現岡山県北東部)に進攻しました。しかし、ここで、家親の進撃を食い止めたのが、備前の宇喜多直家です。直家は、得意の暗殺で、家親を仕留めています(第44回岡山山城参照)。

三村家の跡を継いだのが、家親の息子の元親です。元親は、親の仇である直家を討伐するべく、毛利氏の後援を得ながら何度か戦いを挑みました。しかし、負けが混んで、松山城も一時的に直家と結んだ勢力に占拠されてしまいます。元親による松山城の奪還は成りますが、備中における三村氏の威光に陰りがさしていたのは明らかです。元親は、直家との抗争の中で、守りをかためるべく、松山城を要塞化しました。

そんな折、毛利家の中で、大きな戦略の転換が行われました。毛利氏は、三村元親が前面で戦っていた宇喜多直家と、手を組むことにしたのです。これに元親が大反発し、織田氏と結んで毛利氏に反旗を翻しました(1574年：備中兵乱)。この事態に、毛利氏は8万もの兵を備中に送り、松山城周囲の支城を落として、松山城を包囲しました。毛利は大兵とはいえ、元親によって要塞化された松山城を力攻めにはできず、持久戦に持ち込みました。その結果、戦が始まって約半年後に元親は降伏し、切腹して果てました。戦国大名としての三村家は滅亡し、松山城は毛利氏のものとなりました。

江戸時代

時は下って1600年代の後半です。この時期に松山城を持っていたのが、水谷氏です。この時期の松山城はボロボロで、使える状態になかったようです。もともと不

便な山城でしたから、江戸期に入ってから歴代の城主達は、藩庁を山のふもとに造営して、松山城を荒れるに任せていたのです。

ここで、水谷勝宗が、城の改修に乗り出しました。改修と言っても、ほとんど新築に近い状況だったようです。1681年から3年を要しました。幕府は城の修築に厳しく目を光らせていましたが、この時は、水谷家に許可を出しています。そして、この時に改修（ほぼ新築）された天守や土塀が今に伝わっているわけです。ただし、改修された松山城は、戦のための要塞というよりは、松山藩の象徴のようなものでした。それは、土塀に開いた狭間を見ても解ります。狭間とは、鉄砲や矢で敵を攻撃するための孔です。もし、土塀の下側から攻め上がろうとする敵を撃とうと思えば、この孔は下を向くはずですが、松山城の狭間は水平に開いているのです。つまり、松山城は戦には向いていないのです。この狭間の状態は、NHKの真田丸のオープニングでも確認できました。

さて、松山城を改修した水谷家ですが、勝宗の次の代で跡継ぎがなかったために改易されてしまいます（1694年）。この時に、改易に不満を持つ水谷家の家臣を説得して、松山城を平和裏に明け渡させたのが、後に忠臣蔵で有名になる大石内蔵助です。内蔵助は、この時の経験があったからこそ、播州赤穂城の明け渡しをスムーズに行えたともいわれています。

幕末

幕末のこの城を語るうえで忘れられないのが、山田方谷（1805-77年）です。一般での知名度はありませんが、かなり筋の通った人物で、筆者はたいへん尊敬しています。

山田方谷は、一言でいうと幕末の松山藩の財政改革者です。江戸期の財政再建者という上杉鷹山（ようざん）をすぐに思い浮かべますが、筆者の個人的な見解では、方谷の方が上です。鷹山（+後継2代）が米沢15万石の借金20万両を返済するのに要した期間は約60年で、蓄えた余剰金は5千両でした。一方、方谷は、松山藩5万石の借金10万両を8年で返済し、さらに10万両の余財を成しました。方谷は、もともと農商出身の儒（陽明）学者でしたから、絵に描いたような清廉潔白な人物でした。ただ、それだけなら、せいぜい“質素儉約”で終るのがおちなのですが、彼のすごいところは、当時の藩札（通貨）の流通量を制御してその信用を取り戻し、自藩の生産品を、各地の相場を見ながら、必要とされる場所で自分たちで売り捌いたところなのです。その際に、生産者にはきっちりと対価を払い、藩の収入は物を動かすところに求めました。これ

で、松山藩の人々は、みんなハッピーになったわけです。

この方谷を用いたのが、松山藩板倉家7代（いたくら）の勝静（1823-89年）です。この人も筋の通った立派な人物で、生まれが幕末でなければ名君と呼ばれていたと思われる。この人は、松平定信（まつだいらさだのぶ）の孫、つまりは徳川吉宗（とくがわよしむね）の玄孫に当たる人で、幕府15代徳川慶喜（よしのお）の下で老中首座に着きました。

方谷と勝静は、固い信頼関係で結ばれていましたが、幕末の混乱期にどう対応するかでは、意見、行動とも正反対になってしまいました。方谷は、松山藩の人々のために、幕府とは手を切って新政府側に付くべきと考えていました。一方、勝静は、自らの血筋、慶喜からの信頼、幕府内の立場から、徹底して幕府側に立ち、最後は五稜郭にまで行くことになりました。

方谷は、鳥羽伏見の戦い（1868年）の直後に、藩主勝静が不在のまま勝静を強制的に隠居したことにして、松山城を新政府側に無血開城し、さらに五稜郭まで行ってしまった勝静を強制的に連れ戻して、新政府に自首、謝罪させました。このおかげで、松山城は戦禍を免れ、松山藩の人々も救われたのです。ちなみに、勝静は恩赦の後に松山藩に戻り、方谷を慰労したといえます。

近代から現在

この城は、明治から昭和初期まで、またも荒れ放題となります。そんなときに、この地に赴任した中学校の教師が、個人的な趣味の延長で松山城の状態を調査し、記録を残したことが切っ掛けとなって、地元で修復運動が起こりました。限られた予算で修復するために、地元の女学生達も、瓦を背負って山の上まで上げたそうです。

1950年には、天守、二重櫓、三の平櫓東土塀が重要文化財となり、1956年に、城跡が国の史跡に指定されました。1994年から本丸の復元整備が行われており、多くの門や櫓、土塀が復元され、優良な観光資源になっています。



二重櫓



三の平櫓東土塀

出典：<http://www.city.takahashi.okayama.jp/site/bichu-matsuyama/juyoubunkazai.html>